青春のカケラ

廉

ＰＤＦ小説ネット
Byウメ研究所
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「ＰＤＦ小説ネット」の変換システムが自動的にＰＤＦ化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「ＰＤＦ小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのＰＤＦファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】
青春のカケラ

【Ｎコード】
Ｎ５９０１Ｅ

【作者名】
廉

【あらすじ】
変人と評判の男、鳥居を好きな春香。でも望みのない想い。高３、この長い長い片思いが・・・・・・

好きな人は、学校一変人と評判の男だった。

「春香！鳥居将也（とりい まさや）だよ！」

その声に反応して、春香は窓から身を乗り出す。ちょうど窓の下、鳥居は松の木の傍でぼんやりとしゃがみこんで何かをしている。

「っていうか、あいつ何してんの？」

友達、ゆりの至極（しごく）当然な質問に、春香は自信を持って答える。

「決まってんじゃん。光合成してるんだよ！」

春香の好きな人は、昔から変わらない。変わらずに変だと言われてきた。

小学生のときは、犬の研究とか言って近所の野良犬を尾行し、中学生のときは、しょっちゅう授業中に寝ていて、「りんごとゴリラならどっちがいいですか？」とか言う変な寝言を言った。

しかし、昔からそんな変人、鳥居将也が春香は大好きだった。

「とーりーい！何してんのー？」

春香は松の木の下でしゃがみこむ鳥居の背中に話しかけた。ん？と振り返った彼は、春香の姿を確認するとまたすぐに向こうを向いてしまった。

「見つけた・・・」

何を？と聞きそうになったところで、鳥居は何かを差し出してきた。四葉のクローバーだった。

「はるちゃんにあげる」

高校生になっても、たぶん変人伝説は続いていくと思っていた。春香にはそのほうが好都合だった。だってライバルが減るから。

だけど、最近はおバカブーム到来だからなのか、鳥居は高校でやたら人気者になってしまった。もちろん彼はおバカではない。春香から見れば、とってもかっこいい男の人なのだ。
それに気づいてしまう人が、春香の他にも現れたのだ。

四葉のクローバーを受け取った春香は嬉しさるんるんで教室に戻ると、窓から一部始終を見ていたゆりが待っていた。
「見て見て！もらっちゃったー」
「見てたよ。クローバーねぇ・・・あのさー前から言ってるけど、あの鳥居の何がいいの？」
ゆりは心底呆れたように尋ねる。彼女は春香と小学生のときから友達だったが、彼女はさっぱり鳥居の良さに気づいていないらしい。
「何って・・・優しいところとか、平和なところとか、ルックスだってかっこいいじゃん」
「んー確かにルックスは良さげだけど、変だよ。趣味は光合成なんでしょ？」
「そこが平和でいいんだよ」

初めて出会ったときもそんなカンジだった。今でも覚えている。
小学3年生のとき、春香は学校の花壇の前でぼんやりとしている鳥居を見た。その頃はまだ名前も知らなかったが、なぜか彼が何をしているのか気になってしまった。しかし、しばらくたっても鳥居は動く気配を見せなかった。
とうとう業を煮やした春香は話しかけてしまった。
「ねぇ、さっきから何やってるの？」
初対面なのになれなれしく話しかける彼女だったが、鳥居はそんなことをカケラも気にしていないようであっさりと答えた。
「見てたんだ。花を。すっごく綺麗だよ。植物って光合成っていうのやって元気になるんだよ。すごいよね」
まだ光合成の意味を知らなくて、そのときは鳥居の言っているこ

とがわからなかったが、春香はすっかり鳥居に惹かれてしまったのだ。

その後同じクラスになって、初めてお互いの名前を知った。

四葉のクローバーをずっと大切にしたくて、春香は押し花にすることにした。

図書室で悪戦苦闘しながら、画用紙にテープでクローバーを張っていく。こういうとき、不器用な自分が情けない。

「よしっ！でーきた！」

お世辞にも綺麗とは言えない出来だったが、自分なりに上手くできたほうだと思う。なんてことを思いながら、押し花を空にかざして見ていると、

「それ、いいじゃん」

突然、視界の隅に鳥居の姿が目に入った。

「鳥居！？びっくりしたー！」

「それ、さっきのクローバーだよね」

春香は一瞬頭から飛んでいた押し花のことを思い出して、慌てて次の言葉を考えた。

「うっうん。大切に持ってたら、ラッキーなことがあるかもーって・・・」

急に恥ずかしくなった。今きっと顔が赤いだろう。ぱたぱたと手で扇(あお)ぎながらなんとか冷やそうとした。こんなふうに考えるなんて子供だと思われるかもしれない。

「あるよ、きっと。俺は信じてるから」

黒縁の眼鏡の奥の瞳が笑った。

途端に、また春香の体温が上昇してしまった。普段のミステリアスな雰囲気に加えて、鳥居の笑顔は子犬みたいにかわいいのだ。

自然と春香も笑顔になった・・・・・・・・・そのとき、

「鳥居君」

その雰囲気に別の知らない声が参加してきた。

「はい？」
振り返ると、知らない女の子が立っていた。春香はなんとなく、この人がなんのためにここにいるのかわかってしまったような気がしたのだ。図書室は放課後の５時から３０分間、鳥居のテリトリーだ。
「話があるんですけど、今いいですか・・・・・？」

高校１年生のとき、春香は初めて鳥居がモテることに気づいた。告白されるシーンを偶然見てしまったのだ。
本当に突然で、前触れもなかったから驚いた。それまでずっと変人だって言われていたから。
その後、周囲の鳥居を見る目に気づいた。
自分だけわかっていればいいと思っていた。そんな自分が１番変だったのかもしれない。

「それでそのままにしてきたの？」
ゆりに話すと、驚いたような顔をされた。実際、驚きを通り越して呆れているが。
「それ絶対告られてるって。いいの？いいように丸め込まれちゃってても・・・」
「だって・・・私がどうこうできるわけじゃないし・・・・・」
「ん～・・・この際あんたの男の趣味には目をつむるとして、春香から動かないときっとずっとこのままの関係だよ？はっきり言って、鳥居ってかなりニブそうじゃん？そーいうのはこっちから行かないとダメだって」
わかってる。わかってるけど・・・・望みがないってわかってて告白なんてできない。今のこの関係が壊れるのが怖い。
だから、ずっと逃げてたんだ。

小学校、中学校、高校とずっと同じだった。

今までは時々廊下で会ったり、花壇にいるところを春香が話しかけたり、図書室に行ったりして、お互いに話すことができた。
でも、もう高校3年生。春香にはわかっていた。この関係がそう長くは続かないことに。
春香は地元の大学に、鳥居は東京の大学を志望していると聞いた。

「あぁぁ・・・もぉ・・・・・フラれたらゆりのせいだからね」
「ジュースくらいは恵んであげるよ」
ゆりの言葉に苦笑しながらも、春香はこくんと頷く。そして、駆け出した。
今までない気持ちを抱きながら。
きっといつもなら今頃は図書室にいるのだろうが、告白なんてされてもう帰っちゃっただろう。両想いになっていなければの話だが。
そのとき、ぽつりと顔が濡れた。どうやら雨が降ってきたらしい。それは次第に強くなっていく。
雨か・・・そういえば昔・・・・・

どしゃぶりの雨の中、鳥居は傘もささずに、水溜りにはまった3匹のおたまじゃくしを助けていたことがある。自分はずぶ濡れになりながら、必死に近くの池に運んでいた。
・・・鳥居は変人なんかじゃない。

気づくと目の前にしゃがみこむ男の姿が目に入った。それが鳥居だと気づいたとき、彼もゆっくりとした動作で春香のことを見た。
「あ、はるちゃん。傘もささないでどうしたの？」
「自分だって・・・」
お互いにずぶ濡れだった。傘を持っていない春香はともかく、普通に傘を持っている鳥居はどうしてささないのだろうか。
そしてなにより、こんな道端で何をやっているのだろうか。
「かたつむりを見てたんだ」

春香の疑問に答えるように鳥居は呟いた。春香はその隣にしゃがみこむ。
「鳥居って自然とか好きだよね」
「うん。好きだよ」
そのセリフはきっと自分には言わない。それはわかっている。鳥居はそういう人だから。そういう人だから春香は好きになったんだ。
「・・・・・好き」
言葉は雨音に消えて、相手には聞こえなかった。

「じゃぁ、私もう帰るね」
雨は相変わらず降り続いている。春香は今まで何事もなかったかのように立ち上がると、かたつむりを見ていた鳥居が顔を上げた。
「傘貸すよ」
「いいって！私んちこの近くだから」
そのとき、駆け出そうとした春香の腕を掴んで、そのまま立ち上がった鳥居は春香の耳元で小さく呟いた。
それは、会話の流れに全く合わない言葉。
春香がぽかんとしていると、鳥居は傘をさした。
「入んないの？」
「え・・・？えっ！？」
すっかり混乱してしまった春香の様子を見て、鳥居は本当におかしそうに笑い出した。
「送ってく」
ぎこちなく頷いて、春香は鳥居のもとへ駆け寄る。鞄につけた押し花のクローバーが揺れた。

それは、会話の流れに全く合わない言葉。

「俺も」

（後書き）

久々純愛モノです。

面白かったのでまた書きたいと思います。

読んでくださってありがとうございました。

―廉―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネットは２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、

個人の広告でもＯＫ

縦：140mm　横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧下さい。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5901e/

青春のカケラ

2009年4月12日07時49分発行